

海外果樹農業ニュースレター

(財) 中央果実基金 (03) 3586-1381

2011 年 10 月 第 4 号



現地報告

写真説明 : かき

米国：2011/12 年度におけるカリフォルニア州産ネーブルオレンジ及び全米のカンキツ類の生産見通し 中川 圭子

- 目次 -

現地報告

米国	1
タイ	2
ブラジル	2
フランス	3

果樹産業の動向

・ワシントン州における 2011 年産リンゴの品種別 生産見通し	4
・ワシントン州における 2010/11 年度のリンゴ輸 出状況	4
・2011 年度における世界 のアウトウおよびモモ/ネ クシンの需給	6

トピックス

・果実の消費拡大に関す る話題	7
・台湾の生鮮リンゴ輸入 市場の変化	8

＜カリフォルニア＞

2011/12 年度(2011 年 11 月～2012 年 10 月)のカリフォルニア(CA)州におけるネーブルオレンジの生産見通しが米国農務省より 9 月 12 日付けで公表された。本公表によれば、今年度のネーブルオレンジ総生産量は、昨年度の記録値を 8%下回る 4,400 万箱(約 160 万トン)と予測されている。この総計の 97%にあたる 4,300 万箱が、セントラルバレーで収穫される見通しである。

本予測値は、CA 州内におけるネーブルの結果樹園面積、栽植密度および主産地であるセントラルバレーに位置するマデラ、プレズノ、ツレアレ、キングス、カーンの 5 郡において実施された 1 樹当たりの平均結果個数および 1 果実当たりの平均直径の調査結果を基に算出された。

CA 州のネーブルオレンジ

産業始まって以来最大の豊作となった昨年度のネーブルオレンジは小玉果が多く、販売に苦慮した。しかしながら、世界最大のオレンジ輸出国である南アフリカの減産と世界的なドル安が追い風となって生鮮輸出は好調に伸び、7 月末現在、史上最大の輸出量となっている。米国から輸出される生食用ネーブルオレンジの大半は、CA 州産である。

生食用ネーブルオレンジの輸出増が見られるのはアジア市場で、韓国、中国、マレーシアおよびインド向けの増大が特に著しい。2010 年 11 月～2011 年 7 月の 9 ヶ月間の仕向け先別輸出量の割合は、カナダが 23%で首位を占め、以下、韓国(20%)、日本(13%)、香港(12%)、中国(6%)と続いている。今シーズンは果実肥大が期待されることから、大きなサイズを好む輸

出市場での需要がさらに伸びるものと期待されている。

＜米国全体＞

10 月 12 日付けで米国農務省より公表された 10 月 1 日時点での米国全体のオレンジ生産量は、昨年より 1%増の 2 億 600 万箱(815 万トン)で、うち早中生およびネーブルオレンジは昨年より若干減の 1 億 1,900 万箱(467 万トン)の見通しとなっている。

フロリダ州のオレンジ総計は 5%増の 600 万トンの見通し。

グレープフルーツは 5%減の 108 万トンで、うちフロリダ州は 2%増の 77.5 万トンの見通し。

ミカン類も 2%増の 58 万トンの見通し。



米国における 2011/12 年度におけるカンキツ類の生産見通し

(単位:1,000トン)

品 目	州 名	生産量	品 目	州 名	生産量
早・中生およびネーブル オレンジ	カリフォルニア	1,597	グレープフルーツ	カリフォルニア	123
	フロリダ	3,021		フロリダ	775
	テキサス	54		テキサス	185
	米国全体	4,671		米国全体	1,083
バレンシアオレンジ	カリフォルニア	490	タンセリン/マンダリン	カリフォルニア	374
	フロリダ	2,980		フロリダ	202
	テキサス	13		米国全体	583
	米国全体	3,483		アリゾナ	29
オレンジ総計	カリフォルニア	2,087	レモン	カリフォルニア	726
	フロリダ	6,001		米国全体	755
	テキサス	66			
	米国全体	8,154			

果物を食べて
応援しよう。



タイ：果実の輸出牽引の役割を担うパインアップルほか

中元 進弘

タイ政府は 6 種類のタイ産果実の輸出を昨年の輸出金額 30 億バーツから 100 億バーツに増加させる大きな目標を掲げている。

農業・協同組合省は米国のタイ国政府通商代表事務所 (TTR) に委託して、タイ産のリウガン、レイシ、マンガスチン、ランブータン、マンゴー、パインアップルの 6 種類の果実を販促する。

米国は熱帯果実の殺虫に放射線による食品照射が許可されている国で、タイは米国に対して 2 年間に亘る技術の確立により照射果実の輸出承認を得たが、放射線照射果実の輸出を押し上げるためにさらなる広範な販促が必要としており、現在、米国市場のタイ産果実の浸透に向けた販促活動の計画を進めている。

TTR によると、タイ国内において現在、照射施設を持つ事業者は民間企業 1 社とタイ国家原子力技術研究所 (TINT) の 2 か所のみで、民間企業が設備投資できるような環境作りも必要であるという。

また、TTR はパインアップルの販促活動のために今年の 10 月にも最

初のミッションとして CIS 諸国 (旧ソ連邦諸国) へ出向く予定である。訪問国は 1,500 万人の人口を持つカザフスタン、そして 2,800 万人の人口を持つウズベキスタンのイスラム国で、イスラム国はパインアップルが牛肉消費の消化促進の果実として人気があり、主に第三国から EU 諸国経由で輸入しており、これをタイからの輸入に切り替えれば運送コストや再輸出マージンが抑えられることで価格を 30% 程度安くすることが可能であるとしている。パインアップル産業界は TTR による輸出促進で 40% の輸出増を期待している。

＜長期貯蔵が可能なパイン新品種＞

タイのパインアップルの主産地であるプラチュアップキリカン県で 9 月 30 日～10 月 8 日にかけて「パインアップル 100 周年で世界一」のイベントが実施される。

タイは世界第 1 位のパインアップル製品輸出国であり、同県はタイの全国の生産量の約 4 割を占める全国第 1 位のパインアップル生産県である。今年と同県でパインアップルの生産を始めてから 100 周年に当たり、これを記念してイベントが実施される。同期間中

にプラチュアップキリカン県サムロイヨート郡ライカオ地区のパインアップル栽培農家とカセサート大学との共同により開発された新品種「ルアン・サムロイヨート」(黄色サムロイヨート) のパインアップルが発表される。

この新品種の特徴は他のパタピア品種と異なり、常温で 30 日以上保存することができ、その間味や香りが変わらないという。これは既存のパインアップル品種よりも貯蔵性が高く、世界の記録を更新したといえる。通常、熟したパインアップルは 7 日しか保存ができないため、生鮮果実を輸出、海外で販売するのに適した品種である。また、同品種の形状が筒状であることから、パインアップル缶詰加工にも適しており、果肉に残る果皮の網目をとる必要がないことから、加工工場で人件費を節約でき、加工されたパインアップルの果肉はグレートが高いという利点もある。

現時点では、同品種の苗木は販売されていないものの、試験場で苗の数を増やしてから販売する予定である。

ブラジル：増加する新興諸国のオレンジ果汁消費

中田 秀信

ブラジルの冷凍濃縮オレンジ果汁の輸出量 (FCOJ に換算) は、2003 年の 136 万 2,000 トンから 2010 年には 120 万トンと 11.9% 減少する一方で、輸出額は 11 億 9,300 万ドルから 17 億 7,500 万ドルと 48.8% の増額となった。全国カンキツ果汁輸出業者協会 (CitrusBR) によると、価格が高めで推移しているのは、世界的なオレンジ果汁の需要増加に伴うものでなく、カルフォルニア州のオレンジの供給量が減ったためであるとし、国際的なオレンジ果汁価格の先行きを楽観視していない。

マーケティング戦略の研究機関である Markestrat とエウロモニター調査会社が、スウェーデンの多国籍企業である紙容器会社のテトラパックの調

査データを基に調べたところ、オレンジの価格は供給量に応じて変動しているものの、世界のオレンジ果汁の主要市場 (40 カ国) の消費は 2003～2010 年間に 5.3% 減少する一方、Brics (ブラジル、ロシア、インド、中国) とメキシコの消費は同期間に 41.3% 増加しており、また、モロッコ (743% 増)、アルゼンチン (358.2% 増) およびインドネシア (212.8% 増) の消費も顕著に拡大している。なお、Brics とメキシコを除いた 35 カ国の消費は 9.2% 減少している。

Markestrat の審議会メンバーの一人であると共にオレンジ果汁に関する著作が数多あるマルコス・ファヴァ・ネヴェス氏によると、国民所得が低い Brics + メキシコを始めとする開発途上国でオレンジ果汁の消費は急増しているが、これは経済発展に伴う所得の増

加による食生活の向上を意味している。長期的にはこれ等諸国の消費拡大が期待できると見ており、ブラジルのオレンジ果汁輸出増加の出口は Brics (ブラジルを除く) + メキシコ等への輸出拡大にあるとしている。一方、全国カンキツ果汁輸出業者協会 (CitrusBR) のロバウエル会長によると、Brics + メキシコ等でオレンジ果汁の消費は顕著に伸びているものの、Brics + メキシコでオレンジ果汁の消費が向う 8 年間で倍増したと仮定しても、ブラジルの伝統的な主要輸出市場における消費の減退を補うものではないと、ネヴェス氏の見方に慎重な姿勢を示している。

更に、ロバウエル会長によると、オレンジ果汁の消費が急増している

Brics(ブラジルを除く) + メキシコ向けの輸出には大きな障害があるという。例えば、中国のオレンジ果汁の消費は 2003～2010 年間に 99%増加し 8万 8,000 トンに達している。このため、同国ではオレンジの栽培面積が拡大しつつあり、オレンジ生産では世界第2位のカリフォルニアに迫る勢にあり、オレンジの加工処理能力は

年間 2 万トンにも達しているが、近い将来にオレンジ果汁の輸出も視野に置いている模様である。

因みに、中国のオレンジ果汁は他の新興国と同様に安価な甘味飲料水等にブレンドするためである。この方法は世各国に広まり、オレンジ果汁の消費増加の大きな妨げとなっている。



冷凍濃縮オレンジ果汁の主要市場における消費量の推移

(単位 1,000 トン)

年	主要市場 (40 カ国)	Brics+ メキシコ	主要市場 (35 カ国)
2003 年	2,415	189	2,226
2007 年	2,309	224	2,085
2010 年	2,288	267	2,021
増減率 (%)	-5.3	41.3	-9.2

注: 主要市場 (40 カ国) には Brics+メキシコが含まれ、主要市場 (35 カ国) は Brics+メキシコを除いた数値である。

出所: Markestrat

インドは、冷却あるいは冷凍を要する製品に対する配給網と輸送に対するインフラが未整備である。ロシアの場合は、ブラジル産オレンジ果汁を一旦オランダのロッテルダム港に降ろした後、タンク車で陸路搬送しているために販売価格は高いものとなっている。メキシコは、NAFTA 下で無税で米国へのオレンジ果汁の輸出を伸ばしており、同国への輸出は非常な困難を伴う。

なお、ブラジルのオレンジ果汁会社によると、中国は輸入オレンジ果汁に対するカビや酵母菌等の微生物規則を世界基準より厳しく定めており、必要に応じて同規則を適用することで輸入差し止めを簡単に実行できる体制にあるという。

(2011 年 8 月 26 日付け「Valor Economico」紙)

フランス：EU におけるモモ・ネクタリンの市場隔離助成金の引上げほか

佐川 みか

フランスやスペインの生産者団体は、各国政府や EU 当局に対して、生産過剰になった果実の市場隔離に支払われる補償を増額するよう要求していたが、7 月 29 日の EU 農相会議で、従来 100kg 当たりモモ 16.49€, ネクタリン 19.56€であった補償額を、一律 26.90€に引き上げる決定をした。これは、生産過剰の際に生産者組織 (OP) が果実や野菜を市場に出荷しない場合に、生産者に支払う補償制度で、今回、生産者は引き上げ分全額を EU が負担するよう要求していたが、従来どおり EU と OP が折半すると決められた。

これらの緊急措置に、フランスの生産者は一応の満足を表明したものの、全国果実生産者連盟 (FNPF) は、市場は EU で統一されているのに、フランスの生産者は労賃規制、衛生規則、環境措置など、他の EU 諸国よりも厳しい国内法に縛られている矛盾を指摘し、フランスの生産者の中にモモの生産からの撤退を真剣に考える人がかなりいる現状を訴えた。

(8 月 12 日付け「ルモンド」紙)

＜欧州のモモは今年も価格暴落＞

フランスの今年のモモ・ネクタリン (以下モモ類と記す) の生産量は 31 万 9 千 トンで、昨年より 1%減、2006 年から 2010 年までの 5 年間の年平均生産量よりも 7%減少した (2011 年 9 月 1 日現在の仏農業省統計・予測局の推定値)。しかし、フランス市場で 40%を占めるスペインのモモ生産量が 14%増えたため、フランスの生産者価格は暴落した。

フランスでは 5 月初頭の高湿乾燥で、果実の成熟が早まり、仏産モモ類の出荷がスペイン産やイタリア産と重なり、市場は供給過剰になった。一方、消費は 5 月にドイツで起きた病原性大腸菌の感染騒動の影響で、欧州全体で青果物離れが見られた。近年、モモ類の人気の高まっているロシアは大腸菌感染を理由に、EU からの青果物全ての輸入を禁止したことも、欧州産のモモ類の売り上げに響いた。その上、フランスは 7 月の例外的な冷夏で、夏の果実と親しまれるモモ類の消費は極めて低調であった。(8 月 12 日付け「フィガロ」紙)

＜フランスのリンゴの規格の改正＞

フランスでは、生食用のリンゴは、これまで直径でリンゴのサイズを決めていたが、今年の 8 月 1 日から、重さを基準にして分類することになった。4 月 7 日に、生産者、出荷業者、卸業者、小売業者の諸団体が構成する業者間組織 Interfel で合意に至った。国内で売られるものだけでなく、輸出品にも適用される。加工用リンゴには適用されない。これまででは、コップのような容器に入れてサイズを分類していた。取引では、それを重さに変換して価格を計算していたが、売り手と買い手の間で換算額にズレがでて、問題になることがしばしばあった。新規格では 70g～80g, 80g～95g, 95g～115g, その後 20g 間隔で 3 段階、25g 間隔で 3 段階、30g 間隔で 2 段階、50g 間隔で 2 段階、400g 以上となっている。400g 以上のリンゴに関しては、同じ箱の軽いものと重いものの差が 50g 以内と決められている。



果樹産業の動向

ワシントン州における 2011 年産リンゴの品種別生産見通し

2011年9月19日付け「The Packer」紙

8月にワシントン州における2011年産リンゴの生産見通しが公表され、過去最高の1億900万箱に少し及ばない量が見込まれている。

リンゴの生産量は、その年のアウトウの生産量を反映する傾向にあり、今年のアウトウが大豊作であったため、リンゴも大豊作が見込まれる。

収穫は例年より10日から2週間遅れて推移しており、前年産リンゴの在庫量が少なくなるにつれ、価格は上昇している。

「ガラ」は8月22日の週にスタートすると見込まれ、「ゴールデンデリシャス」の収穫は9月の第1週に始まると

見込まれている。一方、レッドデリシャスは9月の第2週までに有意な量に達すると見込まれている。晩生品種、とりわけ「クリップスピンク」の収穫は11月中旬までには始まると見込まれている。

全般的に収穫が遅れているため、もしリンゴ産地に早い寒波が到来すれば、被害が懸念される。2011/12年度の最も大きな障壁は収穫の遅れとなるかもしれない。

リンゴ市場は、10月の第1週までには十分な量が行き渡る。

2011年産の果実サイズは2010年産より小さいと見込まれるものの、

その程度は品種およびシーズン後半の気象条件によって変わる。8月中旬は完璧な栽培気象条件であった。

2011年度、「ハニークリップ」は大きな利益をもたらすと期待されており、業界の見積もりでは、生産量を1年前の280万箱を上回る360万箱としている。一般に、レッドデリシャス、「ガラ」および「グラニースミス」は1年前とほぼ同じで、「ふじ」は約9%減、「グラニースミス」は6%減と見込まれる。大きさは80玉、88玉および100玉が中心である。

2011年におけるワシントン州産リンゴの品種別生産見通し

品 種	2011 年		2010 年	
	100万ブツェル	トン換算	100万ブツェル	トン換算
レッドデリシャス	33.5	638,205	34.2	651,541
ガラ	22.3	424,835	22.2	422,930
ふじ	13.7	260,997	15.1	287,669
グラニースミス	12.6	240,041	12.9	245,757
ゴールデンデリシャス	10.3	196,224	11.1	211,465
ハニークリップ	3.6	68,583	2.8	53,343
その他	3.1	59,058	2.9	55,248
ブレイバーン	2.8	53,343	2.3	43,817
クリップスピンク	2.7	51,437	2.9	55,248
ジョナゴールド	0.9	17,146	1.1	20,956
カメオ	0.7	13,336	0.8	15,241
合 計	106.3	2,025,111	109.3	2,082,264

注:トンの合計値は換算のため合わない。

出所:ワシントンりんご業界見通し

2011年10月12日(現地時間)付けで米国農務省より公表されたワシントン州のリンゴ生産見通しは、昨年の274万トンより4.5%減の240万トンとなっている。

因みに、米国全体では昨年の422万トンを1%上回る428万トンとなっている。



ワシントン州における 2010/11 年度のリンゴ輸出状況

2011年9月19日付け「The Packer」紙

ワシントン州(WA)産リンゴの生産量の約3分の1は輸出され、輸出がリンゴ販売業者や生産者にとってのサクセスストーリーの大きな要因となっている。

Chelan Fresh 社によると、今年度のWA州のリンゴ生産量は小玉果が多いものの、1億500万箱(199.5万トン)から1億1,000万箱(209万トン)と見込まれ、輸出も

前年度に引き続き好調が期待されるとする。

ドル安が、レッドデリシャスの主要市場であるインドといった新しい市場に加え、カナダやメキシコといった伝統的市場への輸出を推進し、記録的な水準にまで押し上げている。

WA州の販売業者は、7月末までにこれまでの最高記録であった3,600

万箱(68.4万トン)には届かないものの3,500万箱(66.5万トン)を輸出し、うち26%の920万箱(17.5万トン)をメキシコに出荷した。

WA州リンゴ委員会によると、2010/11年度末においては国内市場が堅調であったため輸出を抑制したという。

リンゴ輸出市場の成長の潜在力は、国内市場におけるリンゴの需要

の変化が小さいことに比べると対照的である。

しかしながら、同委員会では、輸出の伸びはドル安に加えてインドおよび中国といった輸入原動力の出現にあり、WA 州は生産規模が拡大しているので、販売業者は新たな輸出市場を見つける必要があるとも指摘する。

【インド市場】

リンゴ生産者の業界団体である WA リンゴ委員会によると、ワシントン州産リンゴは健康によいということを謳った「自然が認めた (nature-approved)」キャンペーンを実施している。

インドへ直接輸出するようになって 10 年が経過し、最近のインドにおける中流階級の成長は輸入果実、とりわけレッドデリシャスの輸出に拍車をかけている。

中流階級の需要拡大に加え、急激に発達している小売セクターは新しい農産物との競争を引き起こしている。

インドはリンゴに 50% の関税を賦課しているにも関わらず、WA 州は 7 月末現在までに前年同時期を 143% 上回る 330 万箱 (6.3 万トン) を輸出した。WA リンゴ委員会によると、インド市場は、400 万～500 万箱 (7.6 万トン～9.5 万トン) のリンゴ輸入潜在力があるとしている。

【メキシコ】

メキシコは北米自由貿易協定 (NAFTA) を米国と締結しているにも関わらず、米国産リンゴに 20% の関税を賦課している。これは NAFTA で認められたメキシコのトラックが国境を越えて米国へ入ることを米国が制限していることに対する報復関税である。

メキシコは WA 州の輸出業者にとって最大の輸出市場であるものの、WA 州産リンゴの全ての市場において輸出が 14% 増加したにもかかわらずメキシコへの輸出は前シーズンを 5% 下回った。

報復関税は、夏の早い時期に 10% に引き下げられ、業界のいくつかの情報筋は関税の残り 10% は年度末に撤廃されることを期待している。

【アジア、中東】

2011 年、香港への輸出は 30% アップし、その一部は不法に中国へ運ばれ、中国市場の需要を満たした。

イスラムの断食月であるラマ丹はインドネシアにおける 8 月末までの輸出需要をかきたてると期待され、また、タイおよびその他の東南アジア諸国における秋祭りもシーズンの早い時期における需要を喚起すると予想される。したがって、収穫が遅れるとシーズン初期における輸出の妨げとなる。

2010/11 年度にワシントン州の輸

出はアジア向けに 25% 増加し、その一部は中国の低価格リンゴの隙間を満たした。

中国における収入の増加に伴い中国産リンゴの価格は上昇し、アジアの輸出市場における競争力を低下させた。

これまで中国は安さでリンゴの価格競争力に打ち勝ってきたものの、現在ではワシントン州産リンゴとの価格差が縮小してきたので、アジア市場においてワシントン州産リンゴへのシフトが進んでいる。

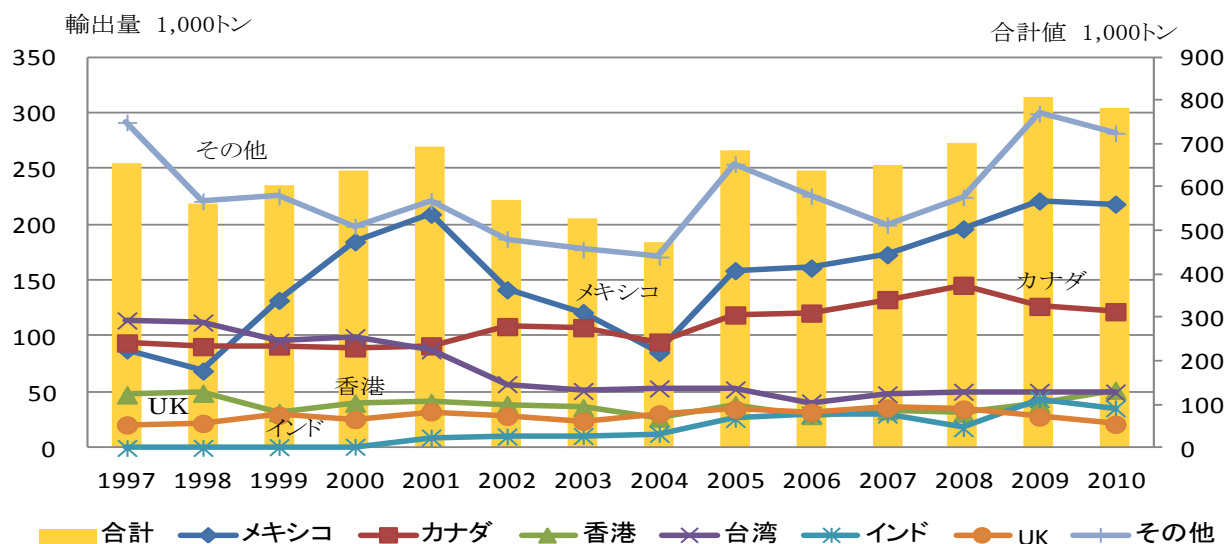
(中央果実注釈: 米国農務省のデータによると中国への輸出は、1997 年の 178.8 トンから 2005 年には 19,293 トンと過去最高を記録した後、2010 年には 9.351 トンとなっている)。

【国内市場】

2010/11 年度における米国のリンゴ市場が堅調に推移した理由の一つとして、リンゴ輸入量が前年同期の 900 万箱から 570 万箱へと 63% も減少したことが挙げられる。

また、米国において最も人気のある「ハニークリスプ」の噂や評価を聞いた海外からの注文により、これまで 3～5 パレットを輸出したものの、米国内では 45～50 ドルの価格を付けるものが海外では 40 ドル台の初めから 30 ドル台にしか付かないため、今後、安いこの価格帯の「ハニークリスプ」を輸出する予定である。

米国におけるリンゴの仕向地別輸出量



2011/12 年度における世界のアウトウおよびモモ/ネクタリンの需給

米国農務省海外農業局 HP (2011 年 9 月公表)

<アウトウの生産量と消費量は減少>

2011/12 年度における世界のアウトウ生産量は、前年より 7%減少して 190 万トンと予測されている。

これは、トルコの生産量が 40%急減したことが要因である。

トルコにおける春の気象条件が冷涼多雨であったため、開花、受粉および生長が妨げられた。トルコの減産は米国および EU の増加をはるかに上回っており、また世界の消費量は 10%減少する原因となっている。

世界の輸出量は 223,000 トンで、ほぼ例年並みと予測されている。供給可能量の僅か 10%ほどが輸出されているだけなので、収穫量の減少の影響を受けていない。トルコの輸出量の減少分は、チリ、EU および米国の増加分を上回っている。

チリの輸出は米国および中国におけるオフシーズン需要により引き続き増加している。

米国産のアウトウはチリ産に対して

季節が反対のため、市場においては競合というよりもむしろ好意的に受け入れられている。米国の輸出量はカナダおよび台湾からの高い需要によって増加すると予測されている。

米国産アウトウは、米国農務省と豪州のバイオセキュリティオーストラリアおよび西オーストラリア州政府の間で 10 年間に亘る交渉の結果、今年 7 月から西オーストラリア州への輸出が可能となった。この進展によって、既にシーズンが始まっている今年度においては 30~45 トンが新たに輸出され、また将来的には毎年 150~300 トンを上回る輸出が期待されている。アウトウは西オーストラリア州へのアクセスを獲得した最初の米国産生鮮果実である。

ロシアは依然として世界第一の輸入市場であり、EU がロシア市場におけるトルコからの供給量の減少分を補っている。

<モモ/ネクタリンの生産量、消費量および貿易量は拡大>

2011/12 年における世界のモモ/ネクタリンの生産量は 1,810 万トンで、昨シーズンから 10%増加すると予測されている。増加はほとんどが中国によるもので、中国では結果樹の増加と豊作が相まって生産量を増加させると見込まれている。生産は中国、EU および米国によって支配されており、またこれらの諸国が収穫量の大部分を消費している。

世界の消費量は中国および EU の消費拡大によって急増すると予測されている。

世界の輸出量は 587,000 トンで、EU が、急拡大しているロシア市場へさらに多くの果実を供給するため 4%増加すると予測されている。

ロシアは、強いルールと強い需要が輸入量を昨年の水準よりも増加させ、ナンバー1 の市場として成長を続けると期待されている。

世界のアウトウの需給

(単位:トン)

国名	年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量		国名	年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生鮮	加工						生鮮	加工
アンルゼンチ	2007/08	6,800	176	2,411	4,565	0	日本	2007/08	17,000	8,525	0	23,025	2,500
	2008/09	6,800	24	2,138	4,686	0		2008/09	17,000	8,525	0	23,025	2,500
	2009/10	5,000	36	1,758	3,278	0		2009/10	16,600	10,013	0	25,133	1,500
	2010/11	6,800	36	3,000	3,836	0		2010/11	19,700	11,009	0	28,959	1,750
	2011/12	6,800	36	3,000	3,836	0		2011/12	21,000	9,300	0	28,450	1,850
豪州	2007/08	12,500	1,676	1,696	12,480	0	ロシア	2007/08	100,000	62,170	13	162,157	
	2008/09	11,250	2,921	1,866	12,305	0		2008/09	63,000	60,015	0	123,015	0
	2009/10	10,750	2,636	1,413	11,973	0		2009/10	69,000	71,580	0	140,580	0
	2010/11	7,500	2,500	890	9,110	0		2010/11	70,000	73,796	0	143,796	0
	2011/12	11,500	2,550	2,000	12,050	0		2011/12	70,000	75,000	0	145,000	0
アジゼヤルンバイ	2007/08	6,606	0	2,735	3,871	0	セルビア	2007/08	28,546	134	15,945	12,735	0
	2008/09	6,845	0	2,719	4,126	0		2008/09	29,551	153	8,758	20,946	0
	2009/10	6,877	0	3,086	3,791	0		2009/10	29,228	129	9,562	19,795	0
	2010/11	5,000	0	1,642	3,358	0		2010/11	29,000	130	8,000	21,130	0
	2011/12	5,000	0	1,200	3,800	0		2011/12	29,000	130	9,000	20,130	0
カナダ	2007/08	8,784	25,507	4,763	29,528	0	台湾	2007/08	0	10,438	0	10,438	0
	2008/09	6,967	24,676	2,465	29,178	0		2008/09	0	10,127	0	10,127	0
	2009/10	14,569	30,489	5,558	39,500	0		2009/10	0	12,229	0	12,229	0
	2010/11	14,000	27,262	5,206	36,056	0		2010/11	0	8,769	0	8,769	0
	2011/12	15,000	30,000	5,000	40,000	0		2011/12	0	11,500	0	11,500	0
チリ	2007/08	61,000	3	43,730	10,000	7,273	トルコ	2007/08	432,000	10	57,056	264,954	110,000
	2008/09	59,000	4	38,427	12,100	8,477		2008/09	525,000	0	50,000	325,000	150,000
	2009/10	50,750	8	33,071	9,725	7,962		2009/10	610,000	0	52,000	378,000	180,000
	2010/11	77,120	8	57,600	10,525	9,003		2010/11	613,000	0	65,000	368,000	180,000
	2011/12	83,000	8	62,000	11,808	9,200		2011/12	370,000	0	46,000	180,000	144,000
中国	2007/08	150,000	611	57	149,954	600	米国	2007/08	390,597	15,276	51,190	172,793	181,890
	2008/09	174,000	3,344	15	176,329	1,000		2008/09	315,083	24,640	45,762	138,379	155,582
	2009/10	185,000	6,184	2	189,982	1,200		2009/10	495,345	12,700	64,664	217,832	225,549
	2010/11	190,000	11,222	7	199,865	1,350		2010/11	361,767	20,195	58,704	187,189	136,069
	2011/12	210,000	28,000	10	227,990	10,000		2011/12	404,660	20,000	60,000	194,225	170,435
EU-27	2007/08	486,051	60,189	9,369	360,978	175,893	合計	2007/08	1,699,884	184,715	188,965	1,217,478	478,156
	2008/09	628,364	33,292	31,201	432,815	197,640		2008/09	1,842,860	167,721	183,351	1,312,031	515,199
	2009/10	724,640	43,855	30,858	481,815	255,822		2009/10	2,217,759	189,859	201,972	1,533,613	672,033
	2010/11	624,697	42,146	20,392	442,252	204,199		2010/11	2,018,584	197,073	220,441	1,462,845	532,371
	2011/12	649,700	25,000	35,000	425,920	213,780		2011/12	1,875,660	201,524	223,210	1,304,709	549,265

注: 年度は北半球では最初の年の 1 月から始まり、南半球では 11 月から始まる。

2011/12 年度における世界のモモ／ネクタリンの需給

(単位:1,000トン)

国 名	年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量		国 名	年度	生産量	輸入量	輸出量	国内消費量	
					生 鮮	加 工						生 鮮	加 工
豪 州	2007/08	110	0	6	50	54	メキシコ	2007/08	192	29	2	220	0
	2008/09	106	0	6	50	49		2008/09	202	38	1	239	0
	2009/10	98	0	5	45	48		2009/10	200	25	1	224	0
	2010/11	90	0	4	40	46		2010/11	205	31	2	234	0
	2011/12	95	0	5	45	45		2011/12	205	35	0	240	0
ブラジル	2007/08	186	20	0	206	0	ロシア	2007/08	43	133	0	176	0
	2008/09	239	17	0	256	0		2008/09	27	162	0	189	0
	2009/10	216	17	0	233	0		2009/10	30	156	0	186	0
	2010/11	220	22	0	242	0		2010/11	30	224	0	254	0
	2011/12	220	25	0	245	0		2011/12	30	250	0	280	0
カナダ	2007/08	32	60	1	91	0	スイス	2007/08	0	28	0	28	0
	2008/09	29	62	1	89	0		2008/09	0	30	0	30	0
	2009/10	26	49	1	74	0		2009/10	0	33	0	33	0
	2010/11	26	53	1	78	0		2010/11	0	32	0	32	0
	2011/12	26	53	1	78	0		2011/12	0	32	0	32	0
チ リ	2007/08	175	0	105	69	2	台 湾	2007/08	28	38	0	66	0
	2008/09	177	0	102	72	4		2008/09	30	40	0	70	0
	2009/10	151	0	89	58	4		2009/10	29	24	0	53	0
	2010/11	161	0	100	58	3		2010/11	28	27	0	55	0
	2011/12	159	0	98	59	3		2011/12	33	25	0	57	0
中 国	2007/08	9,015	0	24	7,855	1,136	トルコ	2007/08	553	0	39	404	110
	2008/09	9,549	0	26	8,251	1,272		2008/09	540	0	19	409	112
	2009/10	10,040	0	40	8,650	1,350		2009/10	547	0	32	395	120
	2010/11	10,515	0	28	9,187	1,300		2010/11	540	0	41	379	120
	2011/12	11,550	0	42	9,758	1,750		2011/12	500	0	30	350	120
EU-27	2007/08	4,050	42	194	3,221	653	米 国	2007/08	1,269	60	105	611	612
	2008/09	3,975	43	196	3,044	777		2008/09	1,285	67	120	702	530
	2009/10	4,086	36	208	3,015	882		2009/10	1,182	51	91	615	526
	2010/11	3,291	27	277	2,270	753		2010/11	1,237	50	111	665	511
	2011/12	3,904	30	300	2,968	649		2011/12	1,210	50	110	628	522
日 本	2007/08	157	0	1	138	19	合 計	2007/08	15,810	410	476	13,136	2,585
	2008/09	157	0	1	138	19		2008/09	16,316	460	473	13,541	2,763
	2009/10	151	0	1	131	19		2009/10	16,756	390	468	13,712	2,948
	2010/11	137	0	0	119	18		2010/11	16,480	465	564	13,612	2,751
	2011/12	145	0	1	126	19		2011/12	18,078	500	587	14,866	3,107

注：年度は北半球では最初の年の 1 月から始まり，南半球では 11 月から始まる。



トピックス

果実の消費拡大に関する話題

2011 年 8 月 15 日及び 9 月 19 日付け「The Packer」紙

＜米国の学校で果実自販機の設置が増加＞

カリフォルニア州に本社を置く Fresh Healthy Vending 社は、昨年から、これまでの自動販売機とは趣を異にする食品自動販売機の設置を進めており、初年度に 800 台を設置し、その 70%は学校に設置された。学校に設置された同社の自販機「フレッシュヘルシー」は、生徒に生鮮果実や野菜といったより栄養的なスナックを供給することを狙ったものである。

同社では、これまで学校、健康クラブ、YMCA 施設への設置に重点を置いてきたが、今後、病院やショッピングモールへの設置も検討している。

自販機「フレッシュヘルシー」で販売されているのは、果物ジュース、グラノラバー（朝食用シリアルを棒状に固めたもの）、乾燥果実製品、焼き菓子、果実スムージー（新鮮な果実（野菜）をミルクセーキ状にした健康飲料）である。

さらにこの他に、同社のウェブサイト(www.freshvending.com)によると有機栽培人参とスライスリンゴの

スナックパックも商品ラインナップに含んでいる。リンゴは青果物中最大の販売品目であり、商品ラインナップに丸ごとのリンゴ等を含められないかと検討しているものの、鮮度保持期間や自販機の商品取出し口に落ちて来るときに傷がついてしまうという問題があり、今のところ実現していないという。

同社ではオバマ大統領夫人が力を入れている肥満撲滅運動「Let's Move」に大きな期待を寄せており、子供の肥満問題への社会的関心の高まりが同社の自販機「フレッシュヘルシー」の設置開始 1 年での急拡大に貢献したという。

＜米国で高まるスライスリンゴの人気＞

フレッシュカットリンゴは今やリンゴ産業に大きなインパクトを与える存在となっている。今年 7 月、マクドナルド社は、今後、同社が提供するメニュー「ハッピーミール」でハンバーガー、チーズバーガーおよびチキンナゲット全てにフレッシュカットリンゴを添えて、2011 年 9 月に一定の市場に限定して販売を始め、2012 年の第

(財) 中央果実基金

(財)中央果実生産出荷安定基金協会

住所

〒107-0052

東京都港区赤坂 1-9-13

三会堂ビル 2 階

電話 (03)3586-1381

FAX (03)5570-1852

お知らせ

年間 4 回発行して
おりました「海外果樹農業
ニュース」に代わりまし
て、4 月より「海外果樹農
業ニュースレター」を年
間 6 回 (4、6、8、10、
12、2 月) 発行するこ
とになりました。

果実輸出市場情報など
できるだけ産地の皆様の
業務に直結するような海
外情報の収集に重点化
し、これらをタイムリー
に発信していくことを心
がけます。

読者の皆様からの積極
的なご要望も歓迎します
ので、今後ともどうぞよ
ろしく願いたいします。



毎日くだもの 200 グラム運動

本誌の翻訳責任は、(財)
中央果実生産出荷安定基金
協会にあり、翻訳の正確さ
に関して Vance
Publishing 社 (The
Packer) および Belrose
社 (The World Apple
Report) の各社は、一切の
責任を負いません。

1 四半期中には同社の全米 14,000 店舗
で全面的に売り出す予定である。

新しいハッピーミールで提供される剥
皮・スライスリンゴの量はこれまでの 3.1
オンス(90g)から 1.2 オンスへ(35g)と大幅
に減量されるものの、スライスリンゴととも
に供されるフレンチフライに代えてスライス
リンゴの量を倍にすることもできるという。

マクドナルドでは 2004 年以来ハッピー
ミールでスライスリンゴも選択できるとし
てきたが、同社による最近の調査結果では
消費者の 88%がスライスリンゴを選べる
ということを知っているものの、実際にスラ
イスリンゴを求めた消費者はハッピーミ
ール購入者の 11%に過ぎなかったという。

全米リンゴ協会の 2011/12 年度のス
ライスリンゴの需要予測によると、スライ
スリンゴはリンゴ生産量 2 億 2,650 万箱(432
万トン)のうち 1.3%に相当する 293 万箱
(56,000 トン)と見込まれている。

スライスリンゴを生産・販売している
Crunch Pak 社によると、2010 年 7 月か
ら今年 6 月までの 1 年間の売り上げは前
年を 27%上回っているという。同社のス
ライスリンゴの 40%は食料品店で売られて
おり、過去 2 ヶ年でスライスリンゴの販売
店は 23%増えている。

同社では過去 4 年間でスライス果実部
門の売り上げが 30%以上伸びており、ス
ライス果実市場は拡大しているとする。そ
の大きな要因の一つとして、最近子供向
けの健康的スナックへの関心が高まって
いることを挙げている。

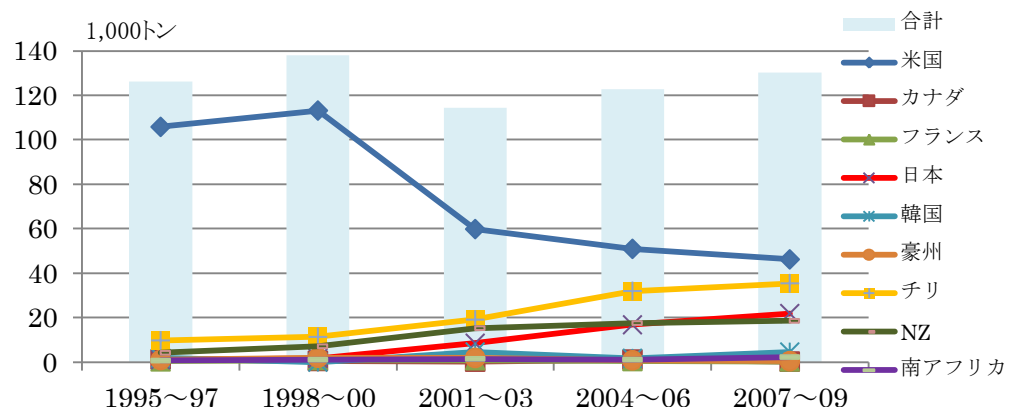
調査によると生食用丸ごとリンゴとフレ
ッシュカットリンゴの競合・共食い度合は僅
かなものだという。同社では、フレッシュ
カット果実の売れ行きがもっとも増えるの
は夏休みが明けて学校が始まる時期と、
クリスマス休暇明けの 1 月初めの時期の
2 度だという。

台湾の生鮮リンゴ輸入市場の変化

The World Apple Report 誌 (2011 年 8 月号)

台湾の生鮮リンゴの輸入量は過去 15
販売年度を通じてほとんど横這いで、増
えているとしてもほんの僅かである。しか
し、その輸入先を見ると劇的ともいえるく
らい変化している。2000 年までは、輸入割
当制度のもとで一定の割当枠を保証され
た米国が、総輸入量の 80%超のシェアを
占めていたが、2002 年の台湾の WTO
加盟とともにこの米国優遇割当制度は廃
止された。その結果米国のシェアは減少
を続け、2007 年から 09 年には 35.5%に
まで落ち込んでいる。カナダ、フランスお
よび豪州も数量、シェアともに減少してい
る。これに対し大きく輸出を伸ばしている
のは、日本と韓国、それに収穫・販売期が

逆である NZ 等の南半球諸国である。中
でも日本からの輸入量は 1995~97 年を
100 として 2007~09 年には 1,847.5 と
驚異的な伸びを示しており、そのシェアも
劇的に増大している。韓国からの輸入も
増大しているが、その動きは不規則で増
減を繰り返す、必ずしも増加一途ではな
い。日本と韓国は主として、台湾市場で
の高級品需要に狙いを定めている。南半
球諸国からの輸入量が 2006/07 年度には
北米からの輸入量を上回るに至り、今で
は台湾の生鮮リンゴ輸入量の約 40%を占
めている。南半球諸国の中ではチリが最も
多いが、NZ が急速に増大しており、南ア
フリカもこの 15 年間で倍増している。



本誌についてのご質問、お気付きの点などがある場合、または他に転載する場合には、左
記上にご一報くださるようお願いいたします。許可なくしての転載および複写 (コピー)
は著作権の侵害となることがありますのでご注意ください。